

東京藝術大学大学美術館所蔵「地蔵菩薩像」の表現技法に関する研究

— 截金線と金泥線の表現効果について —

森本 愛子 (東京藝術大学大学院)

作品概要

原本：「地蔵菩薩像」東京藝術大学大学美術館所蔵 絹本着色 一幅 南北朝時代
縦 91.0cm 横 38.2cm

原本には、地蔵菩薩が左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、雲に乗り飛来する姿が描かれている。地蔵菩薩は平安時代から阿弥陀来迎図の一員として表された。鎌倉時代に入ると六道救済の仏として信仰され、地蔵菩薩が単独で来迎する姿が彫像と絵画において数多く制作された。

右袖には截金で麻葉繋ぎ文の地文が入り、団花文の主文が彩色と金泥線で描かれている。袈裟の田相は茶褐色で、金泥の雷文繋ぎ文が描かれる。濃い青地の条には金泥の蓮唐草文が配され、截金による二重線が条の輪郭に沿って施される。裳は淡い青地の上に金泥によって七宝繋ぎ文が描かれている。裳の裾には截金の唐草文が群緑の上に施される。踏割蓮台は緑青で彩色されており、葉脈は細い截金で表現されている。頭光、衣文線、踏割蓮台の輪郭線には太い截金が使われ、着衣の裏地と頭光には金泥の暈しが見られる。

研究目的

現状模写を通して、制作過程を推測し、制作当時の技法及び素材の研究を行う。原本は着衣の文様を描くために截金と金泥描きを併用している。截金線と金泥線の表現効果を比較し、制作当時の目的と技法材料の関連性を推察することを目的とした。

原本の現状と考察

熟覧調査の際、麻葉繋ぎ文と唐草文には箔の剥がれた跡が確認出来たため截金だと推定した。原本は燻染のため、現在では截金と金泥の間に輝きの差があまり見られない箇所がある。原本の高精細画像を詳細に観察すると、雷文繋ぎ文と蓮唐草文は剥落の仕方が截金とは異なり、線の途切れが少なく箔の剥がれた跡がないことが分かった。また、筆で描いたような絵具の溜まりが確認出来たことから、この文様は金泥線であると判断した。

剥落した截金の上には部分的に金泥の補彩が加えられている。一方、金泥で描かれた文様は補彩と異なり剥落の上から描かれていないため、制作当初の文様であると考えられる。また、雷文繋ぎ文は緑青で描かれた主文の下に描かれていることから、後世の補彩ではないと推測した。

【截金】



麻葉繫ぎ文



唐草文



踏割蓮台（一部に金泥の補彩跡）

【金泥】



雷文繫ぎ文



蓮唐草文



七宝繫ぎ文

現状模写

熟覧調査に加え、原本と色見本を比較して色合わせを行った。その際、色が濃く粒子の細かい絵具が使われていることが分かった。黒色に変化するまで焼いた群青を群緑に混ぜると、群緑を焼いた場合よりも鮮やかな発色が得られた。また、粒子の大きさが異なる絵具を混合し、原本の質感と発色に合わせた。臨写の機会には、模写を原本の横に置き、写真では確認出来ない色彩や絵具の厚さ、截金と金泥の輝き等を確認しながら制作を進めた。

金泥で描かれた文様は截金と見分けがつかないほど線が細く、輝きも截金に近い印象を受けた。原本に近い輝きの金泥を使用するため、金箔を蜂蜜で練り、粒子が粗く輝きの強い金泥を制作した。金箔を練る回数を増やすほど粒子が細くなる。粒子の粗い金泥を細かい粒子の金泥と混ぜ、粒子の大きさを不均一にして原本の輝きに近付けた。雷文繫ぎ文の下地は絹目が詰まっており、絵具で彩色されていた可能性が考えられる。絹目の詰まった下地の方が途切れることなく金泥線を引くことが出来た。実際に金泥で文様を描くと、截金と同じ程度の作業時間と技術が必要であることが分かった。截金線の中には約0.08mmの細かい箔もあり、出来る限りの技を使って仏を荘厳しようとする制作者の意図があったと推測する。

截金には線香の煙で燻蒸し古色を付けた箔を使用した。肌裏紙は、天然染料と墨で薄美濃紙を染め、原本の欠損部から確認した肌裏紙の色合いに近い紙を用いた。完成した模写は原本と同様の仏画二段表具に表装した。

模写を通しての考察

原本を鎌倉時代に描かれた類似作品と比べると、背景の奥行きが乏しく平板な印象を受ける。しかし、模写を行う中で空間を意識して制作されていたことに気が付いた。衣文線に截金を施すと平面性が強調されるが、主要な截金線は他の線よりもわずかに太く、線に強弱がつけられている。また、手前の足と奥の足とで彩色と暈しに微かな差があるなど、空間や立体を意識して彩色されていたことが窺えた。

原本には通常なら截金を施せる文様でも金泥線を用いている部分があり、そのことに疑問を持った。截金と金泥双方の彩色下地を比較した結果、法則性は認められなかった。彩色下地によって截金線と金泥線を使い分けてはいないと考えられる。

金泥線の表現効果を検証するため、全ての文様を截金で施した比較資料を作成し、模写と比較した。金泥線を用いない比較資料の方は線の輝きが均一になり、模写と比べて衣文線が目立ちにくい。光り輝く尊像の表現と、来迎図の動きや空間の表現を両立させるために、金泥線と截金線を併用した可能性が考えられる。また、原本において截金文様と金泥の文様は、お互いなるべく隣り合わないよう配置されている。これらの多様な表現によって画面に複雑さを加え、平板な印象を避けるための工夫をしていたことが窺えた。

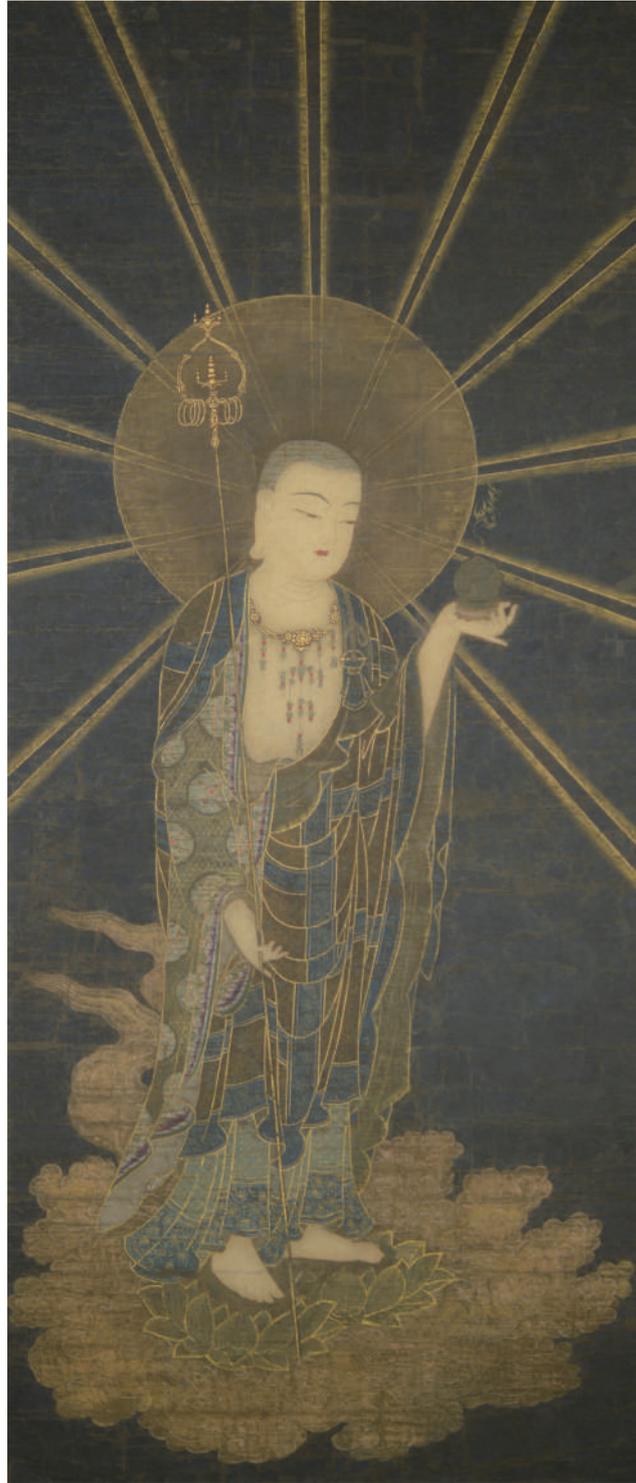


現状模写



比較資料

熟覧調査の際、画面全体が淡い金色の光を発しているような印象を受けた。これは全体に截金が施されているためで、金箔や金泥は光を表現するために使用したのだと実感した。原本は、青や緑などの寒色系と金を中心にした色彩で構成されている。模写を通して、制作者が群青や緑青の色と金の表現に対して繊細な意識を持っていたことが理解出来た。



東京藝術大学大学美術館所蔵「地藏菩薩像」現状模写

参考文献

真鍋広済『地藏菩薩の研究』1960年 三密堂書店

毛利久「地藏菩薩像の形相」『佛教芸術』97号 1974年 毎日新聞社

松島健 日本美術4 239「地藏菩薩像」1986年 至文堂